

じっくり心をこめて

スロー フード

66



豆腐寄せ

寒天を使っているのので、夏の暑い時期に冷やして食べてもさっぱりしています。具材を変えると、通年食べられる一品です。

《今月のご紹介》

関川村食生活改善推進員 の皆さん

材料 (4人分)

- ・木綿豆腐 400g ・干しいたけ 2枚
- ・ひじき(乾) あれば5g ・くるみ 30g
- ・枝豆(さや付き) 80g ・粉寒天 8g
- ・水 3カップ ・砂糖 適量 ・みりん 適量
- ・塩 少々

(調味料)

- ・水 適量 ・砂糖 大さじ1/2 ・しょうゆ 大さじ2

作り方

豆腐は粗くほぐして、熱湯でゆでる。
くるみは熱湯にくぐらせてアクをぬき、細かく刻む。枝豆はゆでて、さやから取り出しておく。
ひじきは水で戻す。干しいたけも水で戻して、せん切りにする。
鍋にひじきとしいたけ、調味料を入れて、ひたひたの水で煮る。汁が少なくなるまで煮詰めてザルに上げ、残り汁はとっておく。
粉寒天は砂糖と予め混ぜてから3カップの水に溶かし、弱火にかける。沸騰の直前に残り汁とみりん、塩を加え、を入れてよく混ぜ、火からおろす。粗熱を取って、流し型に入れて固める。
固まったら流し型から取り出し、食べやすい大きさに切る。

せきかわ文芸

ズル

短歌

お祭りだ孫も曾孫も飛んでゆく夫も

高橋 イツ

見てよと空を見上げる

(愛広苑)

今いちど会つて語りき友なるに呼び声

須貝 恵美

届かぬ常夏の地に

(高田)

ギボシ咲く季節は悲し大な糸で崩れし

小池 啓子

瓦の傍でさ揺らぐ

(下関)

船中に横たわりいる人々の姿はジグソー・

渡辺千恵子

パズルのごとし

(上関)

サイパンのパンザイ・トラフに身を捨る

佐藤 庄七

いくさの悪魔に追われる住民

(愛広苑)





歌人鈴木忠衛さんは昭和三年九月二十六日関川村下関に鈴木忠二の長男として生れた。小学生の頃から長塚節に憧れ、「土」を読みながら農民作家を夢みていた。しかし家庭の事情で農を断念して昭和十八年高等小学校

近・現代 関川郷の人びと

執筆者：佐藤貞治（「せきかわ歴史とみちの館」館長）

鈴木忠衛

を卒業すると横浜市で軍需工場に就職した。戦後、昭和二十五年郷里で「鈴木ラジオ店」を開店し現在に至っている。中年を過ぎた頃より詩歌への想を抑え難く短歌創作を始めた。土屋文明の「短歌入門」を読み、解説者の近藤芳美を知り、昭和六十三年「未来短歌会」に入会した。入会以来近藤芳美の教えを受け平和祈念の歌を中心に作歌を続けた。平成九年古希を迎え、歌集「越路の涯に」を出版。続いて平成十四年第二歌集「星霜」を出版した。鈴木さんの所属する結社「未来」は戦後アララギ系の若者が多く結集し、自由な雰囲気を持って歌壇に新風を送り込んだ。その主宰者の近藤芳美が序文を、また主要同人の小野寺幸男から解説の寄稿を受けているのは鈴木さんの実力を語っている。

近藤芳美は序文の中で冬は雪深く、波荒れる日本海の暗さに生きる北国の人に共通する口重さと共に、ひたすら生活身辺に關わってうたう質実な生活詩であると評している。また小野寺幸男は「越路の涯に」の冒頭の一首

風花のきらめき飛ぶを見て
たり北国に住む寂しさの果て
について、美しく寂しい歌である。豪雪地帯に住むという厳しさはない。あたかも一巻の序歌

ようである。後にくつもいくつも歌われるであろうことを予感させると解説している。また歌人阿部昌彦は次のように評している。社会詠に優れた作品が歌集に多く見られるが、中でも

災害の復旧のなりしこの村を
過疎とて逃れるわけにはゆかぬ
故郷の蘇生を願う若者に縁談
遠く過疎進みゆく
屋根雪を下ろし続けて半世紀
悔いも迷いも捨て落とし来ぬ
と、故郷の現実と自己を詠んだ
作品も心に響いてくる。

大方は生活詠・社会詠ながら、時折、関川の自然に深く入ったの秀歌がある。その背景には宿縁の「寂しさ」が漂っている。過疎の村なれど八千三百人達がある澁刺としてこの歌には鈴木さんの愛郷の心がある。その心は「星霜」の最後を飾る。

戦いのなき世を希い残照に染まる荒川溪谷に佇つ
鈴木忠衛さんは短歌を真剣に詠み、また村の短歌愛好者に熱心に指導を続ける貴重な存在の人である。

著書

- ・越路の涯に 六法出版社
- ・星霜 六法出版社

初代
鈴木家の系図
忠二 忠衛 聡彦

せきかわ文芸

関川俳句の会作品

- 月見草眠むたげにして散歩道 渡辺しづい
- 梅雨晴れて祇園の銚の天仰ぐ 渋谷 くに
- 白桃の瑞々しきに触れてみる 南 セツ
- 水遊び喜々とたわむる児平和の画 佐藤 ノブ
- 窓ガラス磨き色濃し百日紅 青木 慶一
- 鮎の香のほかに残れる水鏡 五十嵐貞子

せきかわ柳会作品「鎖・柱」「雑詠」

- 柱にキズ遠い昔を語ってる 渡辺しづい
- 廃家にも漆の柱凜と居る 平田 千恵
- 冗談がいつか鎖になった仲間 南 セツ
- 愛犬の鎖に引かれ散歩する 佐藤 ノブ
- 共白髪大黒柱は卒寿まで 本間 イミ
- 鎖でもやっぱりあれば安心す 高橋 イツ
- 軽快に語りし友がうらやまし 高橋 イツ
- うわさだけは良く聞こえてるこの耳よ 高橋 イツ
- 宝物錆等気にせず眺めてる 高橋 イツ